



熟練した技術を要する「甘日市ろくろ」と呼ばれる木工ろくろ。けん玉の「血胴（さらどう）」と呼ばれる部分の皿にくぼみを付ける作業。半世紀以上けん玉作りに携わる西村さんは「これほど難しいものはない」と語る。

親しまれているけん玉の原形である。その江草さんが甘日市を訪れ、このまちでのけん玉作りが始まる。

けん玉は大正13年ころから関西を中心に流行が始まり、全国へと広まっていった。そして昭和7年から10年にかけて、日本中で爆発的なブームとなる。

戦時中は一時製造を休止していたが、戦後昭和21年から23年に再びブームとなる。そして、昭和45年のピーク時には製造が間に合わない状態だったと

いう。最盛期には6軒以上の業者が製造し、甘日市は全国で約4割のシェアを占めていた。年間製造数は約30万個を越え、国内はもとより海外にも輸出していた。

しかし、子どもたちの遊びが変化するとともに、次第にけん玉で遊ぶ姿を見かけなくなるようになる。その後、テレビゲームなどの流行により、けん玉製造業者の転廃業が相次いだ。そして、平成10年、最後の1社と

なった共栄玩具(株)も、ついに生産を中止した。

日本一の生産高を誇ったけん玉の生産が終わった甘日市。技術的な難しさから復活のめどはしばらく立たず、多くの市民がその復活を待ち望んだ。

そして平成13年、はつかいち観光協会、商工会議所、市が連携し、甘日市市木利用センターで、けん玉製造が復活を遂げる。その立役者となったのが、共栄玩具(株)を運営していた西村保宣さんだ。市産業振興公社の依頼と、多くの人の「けん玉を復活させたい」という声から引き受けたという。

20歳からけん玉製造に携わり、半世紀以上手作りの技を守り続けてきた西村さん。「このまちは、かつて日本一のけん玉生産量を誇り、『木工のまち』とし



けん玉マスコット「たまちゃん」  
性別 女の子  
年齢 ないしよ  
特技 けん玉



新宮中央公園「けん玉公園」

公園の中にある大きな遊具は、「たまちゃんの宮殿」。天守閣だけでなく、搭や遊びの要素にもけん玉を取り入れてある。



なべたに・かずや  
銅谷 一也さん  
(51歳・大野三槍谷)

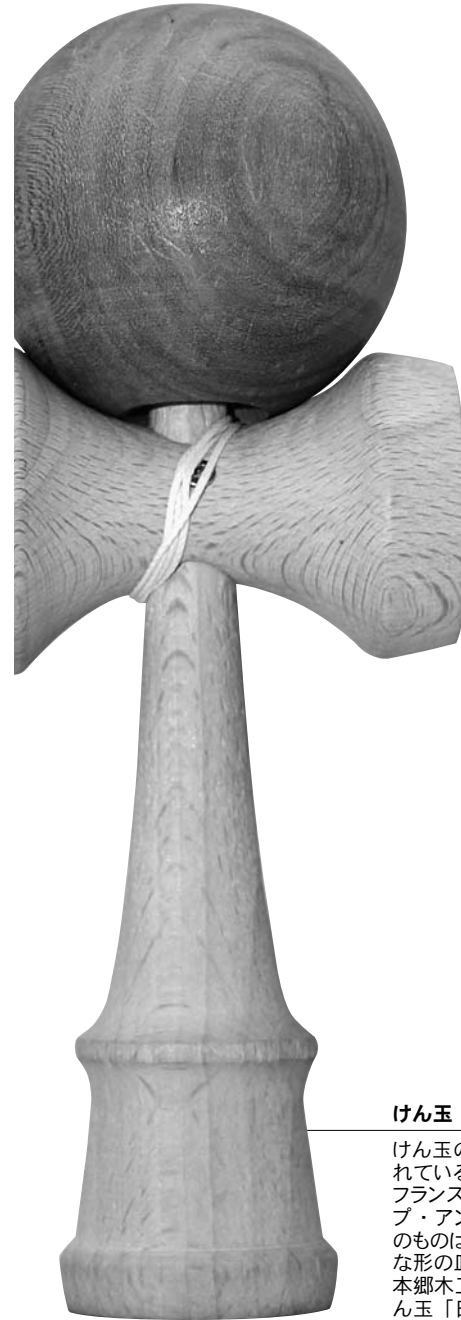
## 発祥の地で、けん玉を絶やしてはならない。

自動車販売会社を辞め、6年前に義父が営む木工所に転職した銅谷さん。市などでつくる協議会が開いた木工デザイン研修を受講し、木製の知育玩具の開発に取り組んでいる。西村さんへの弟子入りには、市職員が銅谷さんに働きかけて実現した。

「発祥の地であるのに、西村さんが一人で続けているのを知り、これから将来どうなるんだろうと思っていました。お話をいただいたときは二つ返事で快諾しました」と銅谷さん。しかし、「50年

のキャリアの差は大きいです」と語る。同じ材料の木でも場所によって固さや木目は一つ一つ異なり、同じものは一つとしてないという。そのため、その都度、使う刃を変えらるること。

「今は早く西村さんの技を引き継ぐことに必死です。しかし、将来は西村さんの技に、自分の技もプラスして次代に引き継いでいきたいです。何より、発祥の地であるけん玉を絶やしたくないですね。」



けん玉

けん玉の原型は古代中国で考えられたと言われている。ヨーロッパには16世紀ごろ伝わり、フランス語で「ピルボケー」、英語では「カップ・アンド・ボール」と呼ばれていた。当時のものは現在のものと形が異なり、太鼓のような形の血胴はなかった。大正10年、甘日市の本郷木工を訪れた江草氏によって、現在のけん玉「日月ボール」の製造が始まった。

近世以前から、中国山地の木材を積み出す港があり、木材の集積地として栄えてきた甘日市。江戸中期にはこの豊富な素材をもとに、ろくろ技術を中心とした木工業が発展した。

その代表的なものは「傘用ろくろ」と言われるもので、和傘の上部にある最も精巧な部品だった。甘日市で生産された「傘用ろくろ」はその技術の高さから、「甘日市ろくろ」の名で知られるようになった。また、商業のまちとして栄えていたこともあり、ろくろ技術を生かした「甘日市そろばん」も全国で有名になった。

明治時代に入ると、特産の木工玩具の製造が始まる。また、この頃から木工玩具と並んでろくろ技術を利用したさまざまな工芸品が生産されるようになり、宮島の観光客の土産としても盛んに作られた。

その後、大正時代には製材業が発展し、近代的木工業の幕開けを迎えた。

そんな折、呉市の江草濱次さんが、明治期のけん玉を改良し、実用新案として登録したのが大正8年だった。「太陽」を表す玉と、三日月型に彫った皿を「月」と見立て、「日月ボール」と名付けられた。この「日月ボール」が、現在多くの人々に受け継がれている。



にしむら・やすのり  
西村 保宣さん  
(75歳・本町)

## 木工は終わりのない世界。だからおもしろい。

20歳のころから、父が始めた木工業を手伝い始め、共栄玩具(株)で木製玩具の製造を手掛けてきた西村さん。父からは「技術は見て盗め」と教えられたという。

「けん玉が全国でブームになったきっかけには、観光地でのお土産として売られたことが大きいですね。宮島にもたくさん置いていただきました。昭和40年代には、製造が間に合わず、「朝、問屋さんが家の前で待っていることも多かったです

ね」と当時を振り返る。

「木は湿気により、四季を通じて大きくもなり、小さくもなります。また、同じ木でも固いところもあれば柔らかいところもある。木工のろくろは簡単に覚えられないものではありません。だから、後継者の育成が必要なんです。」

「つらい時も多いが、木工は終わりのない世界。だからおもしろいんです。生涯を通して挑戦し続けます」と話してくれた。

# わがまちに、けん玉ありー

繁栄から衰退、そして復活へー

甘日市の技術が生んだ遊びの文化、けん玉。最盛期には全国で約4割のシェアを占めていた。しかし、子どもの遊びも時代とともに大きく変わり、平成10年、最後の1社も生産を中止。

一時、このまちからけん玉の音が消えた。まちのシンボル、けん玉。多くの人が復活を願った。そして平成12年、場所を移し、製造が復活する。そこでけん玉作りに携わる人にお話を伺った。